背中を押してくれたのはママ友

カフェ「aoitori」は玄関で靴を脱ぐ。店長の高杉さんの「小さい子にも安心で、お母さんにもくつろいでもらいたい」というこだわりである。「幸せはちかくにある」という物語からとった店名にちなんで青い鳥の小物が店内を彩る。10人ほどで満員になる店は、できるだけお金をかけないようにと友人たちが内装を手伝った。高杉さんを支える人たちの想いがつまっている。

話をすることが信頼を生む

「祖母がレストランをしていて、人が集まる空気が好きだった。私も人の集まる場所、カフェを作ることを長年考えていた」と高杉さん。仕事を考えるとき「何かしたいという気持ちと子どもの帰りを待っていてあげたいという気持ち」から自宅で開店することを決意した。

ママ友で今はスタッフの佐々木さんは「高杉さんはいつもカフェをしたいと夢を語っていた。私も彼女の夢に乗っかりたい、応援したいと思った」と言う。4人のスタッフは佐々木さんと同じく全員ママ友。ママ友ネットワークで仕事をするにあたり高杉さんは「筋を通したい」と考えている。「企業で働いていたとき、決定権はないのに責任だけがある理不尽さを強く感じていたから、私はスタッフみんなに納得してもらえるようにきちんと話をします」。スタッフからの提案を採用することもある。「たいてい彼女の心は決まっているけれど、きちんと真正面から話を通してくれる」と佐々木さんは高杉さんの姿勢に信頼を置く。

「仕事」という視点をはずさない

気になる経営状態は、営業時間も自分の都合に合わせているので、稼ぐまではいかないが、収支はかろうじて黒字とのこと。仕込みや調理は高杉さんが一人で担当。スタッフは一日一人ずつが入り、謝礼2000円。「楽しいし、支えたいからお金はいらない」と佐々木さんは言うが、高杉さんは「子どもがいて制限があってもお金を稼げる場所があってもいいんじゃないか」と譲れない信念がある。

佐々木亜理多さん　高杉智美さん

カバンや小物など、ハンドメイド商品も売っている。商品の価格をつけるときもそれなりの値段をつけないといけないと言う。「安くてもいいという姿勢ではなく、丁寧に作って商品に付加価値をつけることが作り続けるためには必要。作り手の将来のためにも大切なこと」。ネットショップをしていたときから変わらない考えだ。

作り手でもある佐々木さんは「初めは素人だし安くてもいいという考えだったけれど、値段に見合うように丁寧により良いものを目指すようになりました。仕事という観点を高杉さんに教えてもらいました」

友人関係に甘えるけれど、甘えない

「aoitori」の10年後を尋ねると、高杉さんは「自分が不便さを感じた子育て世代の人が安心してくつろげる場所であり続けたいと思う」。始めたときに抱いた気持ちを忘れない。そして「近い将来には、スタッフにそれなりの給与が出せる経営状態にしていきたい」

子どもも、そして自分の夢と友だちを大事にする働き方を模索する高杉さん。お忙しい中、ありがとうございました。

Petit Cafe　aoi tori
営業日時：月・火・木・金（祝は休み、春夏冬の一定期間は変則営業）／9:00〜15:00
場　　所：兵庫県西宮市甲子園3番町
Ｍａｉｌ：info@aoi-tori.ciao.jp

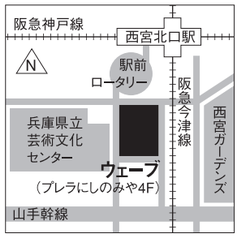
編集後記

○ようやく楽しくなってきた頃に編集委員任期は終わり、もう少し続けたかったなと。今までありがとうございました。（ちび）　○もう終わり。と思うと少し寂しかったり、ホッとしてたり。文章書くってしんどいけど形になるとうれしいですね。良い経験をありがとうございました。（でめ）　○ホントに私書けるのか？　からの始まりで文章を書くって事は大変だったけど、それ以上にいろんな事を知ることができ、振り返ってみれば楽しかった。ありがとうございました。（みかん）☺☺☺☺

■ネットワーク委員とは：西宮市男女共同参画センター　ウェーブを拠点に市民参画の事業を推進することを目的に公募で選ばれた市民（任期2年）。現在の第5期委員は主に情報誌の編集・発行をしている。
■ウェーブ（WAVE）の意味：「男女がともに行動し、活気に満ちた平等社会をめざす」ことを意味する言葉（With/Act/Vitality/Equality）の頭文字と、男女共同参画社会の実現に向けて大きな波（うねり）をつくっていこう、という思いがこめられています。

ウェーブは、男女共同参画社会の実現をめざす施設です。性別、年齢、国籍にかかわらず、ご利用いただけます。
◎開館時間　1月4日〜12月28日／9:00〜22:00
◎受付時間　月〜土曜日（年末年始、休日除く）／9:00〜17:15

WAVE PRESS Vol.11
●発行日　2011年3月31日
●編集・発行
西宮市男女共同参画センター
ウェーブネットワーク委員会
〒663-8204 西宮市高松町4番8号
プレラにしのみや4階
Tel. 0798-64-9495
Fax. 0798-64-9496
http://www.nishi.or.jp/homepage/wave/



市民がつくる、市民のための、男女共同参画社会をめざす情報誌「ウェーブ プレス」
WAVE PRESS
2011 MARCH Vol.11

いつまで、専業主婦 VS 兼業主婦

「結婚しないの？」vs「女の幸せは結婚だけじゃないよね」。「子どもはまだ？」vs「夫婦二人の時間を楽しみなさい」。「子育てがあなたの仕事」vs「家に居たら暇でしょ」。相反する言葉に囲まれ、一つを選べば、もう一つに責められる。“女の生きる道”は相反する価値観との戦いなのか。

“夕飯後ソファで寝転がってテレビを見て笑っている夫”を見ながら、ふと思う…

あなた、助け合っていこうねって言いませんでした？

結婚して夫の給料で生活できるようになったとき、私は生活を考えずに仕事を選べることができ、幸せだと思った。しかし引き換えのように、ごく当たり前のように家事が私の肩にのっかってきた。夫がたまに家事をするとなぜか申し訳ない気がして「ごめんね、ありがとう」と言ってしまう。

子どもが生まれたら、さらに育児が私の肩にだけのっかってきた。「怖くて風呂は入れられない」長男が新生児のときに夫が発した言葉だ。私だってコワイよ。

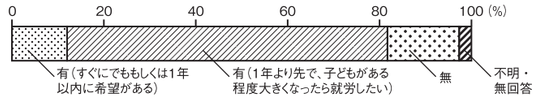
専業主婦でいると社会にとり残されたような気がして「働きたい」と夫に言うと、「いいけど、しんどくないの？」。そのときは言葉の意味するところがわからなかったけれど、働き始めてすぐに理解できた。「仕事もして、家事＋育児、全部、君がするんだよ」という言葉が隠れていたことを。

休日さえもない家事・育児と仕事の両立、無理でしょ

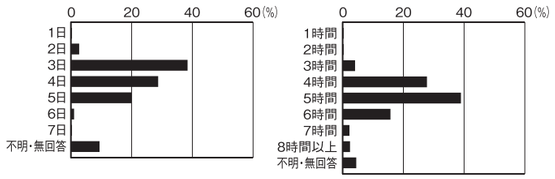
職場で「子どもを抱えて大変ね」と言われつつもそれ相応の質と量の仕事を求められている私は、“夕飯後ソファで寝転がってテレビを見て笑っている夫”を見ながらふと思う、「一日何時間働けるだろう」と。

西宮市の調査によると、未就労の母親の就労希望は「1年以内」12.8%、「1年より先」68.9%と8割以上が働きたいと考えている（グラフ①）。希望する就労形態はパートタイム、アルバイト等が84%。さらに希望する1週間あたりの日数と時間は、「3日」が38.4%、「1日あたり5時間」が39.3%と一番多い（グラフ②）。家事・育児をこなすには、それくらいの働き方がいい、というよりそれくらいじゃないと無理だと思う。

グラフ①　母親の就労希望



グラフ②　希望する1週間当たりの日数と1日当たりの勤務時間



男女雇用機会均等法、子育て支援と叫ぶ世間もまた厳しい。同調査で「出産を期に離職した母親」50.8%と一番多く、その中の40.9%は、「職場に仕事と家庭の両立を支援する制度や働き続けやすい環境」「保育サービスと職場の両立支援」「保育サービスが確実に利用できる見込み」が整っていたら、継続して就労していたと答えている。

就きたい仕事を見つけても保育所との時間が合わない。「子どもが病気のときは？」と聞かれても答えられない。給料は、ほぼ保育料に水平移動。そもそも保育所は見つかるのか？

子どもが幼い時期は短いから子育てを楽しむのもアリ、のはず

「じゃあなんで働きたいのか？」自問した。家事育児は、金銭価値の存在しないアンペイドワーク。そのうえ、休日さえも存在しない。

夫は子どもを「可愛いやん」と言うくせに、私が一人で外出すると「早く帰ってきて」と電話を鳴らす。帰ると「二人もいっぺんに相手したら疲れたわ、休ませて」と即、育児放棄。そんなとき、子どもを保育所に預けて働いている友だちが羨ましくて仕方なかった。

働き出して、振り込まれた給料を見ると、社会に少し認められた気分になった。が、“夕飯後ソファで寝転がってテレビを見て笑っている夫”を見ながらふと思う、「私も誰にも邪魔されず何も気にせずテレビを見る時間があったなら、専業主婦を選んでいたかもしれない」と。

それぞれの立場の可能性に想像力と思いやりを…

女性の状況はいろいろですが、お互いちがうところに目をやるのではなく、女性ならではの共通の問題に気づいてください。その気づきから、立場のちがいを超えて女性同士繋がりましょう。

伊田久美子
大阪府立大学人間社会学研究科教授・同学女性学研究センター研究員
家事労働論、イタリア・フェミニズム研究、ジェンダー視点による労働概念の研究を行っている。共訳「家事労働に賃金を　フェミニズムの新たな展望」(インパクト出版会)、訳書「愛の労働」(インパクト出版会)など。

W（インタビュアー）：私は出産直前に仕事を辞めました。結婚や出産は喜びでしたし、育児と家事の 24 時間体制で子どもの成長を見守ることができました。でも、仕事をしていないと社会から切り離されたような孤立感がありました。女性は仕事を続けること自体が難しいうえに、一度辞めてしまうと以前と同じ条件の仕事に就くのは難しいです。仕事を続けるにしても保育所問題や子どもが病気になったときの対処などあらゆる問題に直面します。

I（伊田）：女性の年齢階級別労働力率（グラフ③）をみると、20 代後半と 40 代後半の二つを頂点に 30 代後半を底辺とする M 字型曲線を描きます。この M 字型は、女性は結婚・出産・育児等の理由で離職する人が多いことを表しています。これに就業希望を加えた「潜在的労働力率」は M 字の底がやや浅くなっており、「働きたい」と希望しながらも「結婚・出産・育児」VS「仕事」の選択に直面し、やむを得ず仕事を辞めていく女性が多いことがわかります（グラフ④）。両立したいけれど、男性並みの長時間労働はできないし、実家も遠い。夫は長時間勤務で家事・育児のサポートは望めないし、両立への理解もない。しがらみの中で、もちろん家族への愛情もありますが、どちらかを選びます。

「パート勤務が女性の望まれる働き方よ」と言われ、再就職では年齢差別や正社員雇用も厳しく女性の非正規雇用が進みました（グラフ⑤）。育児休業制度は施行されましたが、制度を使えない人も多く7割の女性が出産前の仕事を辞めています。個々の家庭の事情もありますが、女性だけに二者択一を強制する社会構造の問題だと考えています。

W：夫に家事を「手伝って」と言えば「仕事で疲れている」。女性がやるものだという意識もあり、「定年退職してからするわ」と答えます。

I：すでに男性の生涯賃金は下がり、「主婦と男性世帯主」の枠組みは幻想になりました。しかし、男性の長時間労働は減らず（グラフ⑥）、疲れきって家庭生活が十分できない状況は変わりません（グラフ⑦）。大黒柱の責任感から必死で働いているのは究極的には「生活」、お金の回らないところを支えるためです。

「主婦」の仕事とされる家事・育児・介護などは生活をする上で必要不可欠なものです。このような大事な仕事は自分一人で抱え込むのではなく、夫や子ども等と分かち合う方が家族の関係も一層親密になるのではないでしょうか。とくに男の子の育て方は大事ですね。家事を分担させ生活自立のできるように育てるのが本人のためにもなるのではないでしょうか。

W：最近、育児をする男性は「育メン」と呼ばれ、話題になっています。一方、女性は育児のみならず、家事も介護もするのは当たり前、その上「働きましょう」。だからでしょうか、働いていると「家事・育児はできているの」と言われ、専業主婦だと「仕事はしないの」と言われる。女性は働いても働かなくても、どちらにしても居心地が悪い。

I：少子高齢化問題が浮き彫りになった 1980 年代以降、医療・介護の社会的コストアップが予測されました。早くから少子高齢化が進行していた北欧諸国等は女性を納税者にするため、女性が働ける社会へと方向転換しました。それまでアンペイドワークだった育児や介護などのケアワークを社会全体の問題として捉えた政策を進めてきました。

一方、80 年代の日本は世界の流れと逆行し女性の社会参画から目をそむけ、「主婦と男性世帯主」の枠組みを守ろうとしました。女性が家にいて育児・介護をすることでケアワークにかかるコストを見えなくし、社会的コストアップを避けてきたのですね。

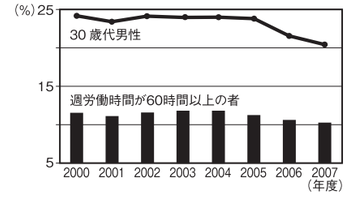
その代表的政策が「103 万の壁」と呼ばれる所得税免除や、年金法の改正によりできた雇用者の配偶者―多くは「妻」ですが―の保険料を免除する国民年金 3 号被保険者制度などの、専業主婦を優遇する「主婦への歯止め政策」でした。この制度によって、女性がパートで働くことを後押しし、女性が家事・育児・介護をしながら職場では最低限の仕事しかできない環境を整えました。強力に誘導する政策があれば選択の自由は狭められてしまいます。専業主婦を選んだ個人の自己責任とは言えないでしょう。

W：さまざまな立場の女性にメッセージを。

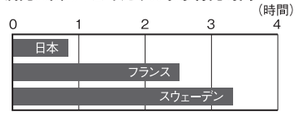
I：お金を稼ぐ仕事をしていないことを、自分に能力がないからとか、努力していないからと思うのは間違っています。女性だけが仕事か家庭かを選ばなくてはならず、また多くの女性がパート労働を選ばなければならないのは、社会構造の問題ですから。

働き続けることができた女性はある種の幸運に恵まれていたからかもしれません。個人の能力や努力はもちろんですが、日本社会の現状では夫や実家の協力なしには続けられなかったでしょう。女性だけが選ばされている状況にあって、専業主婦も働いている女性も立場は紙一重です。家事・育児・介護を女性にしてもらうことを期待した専業主婦「優遇」政策のある中で、働く女性と専業主婦が対立することは不毛でしょう。女性ならではの共通の問題があることに気づくことで、立場を超えて連帯できるのではないでしょうか。

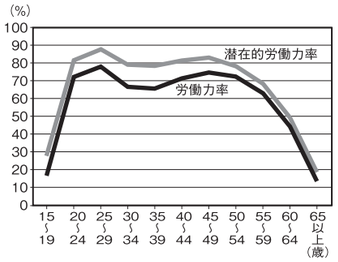
グラフ⑥
週労働時間が60時間以上の男性労働者の割合の推移



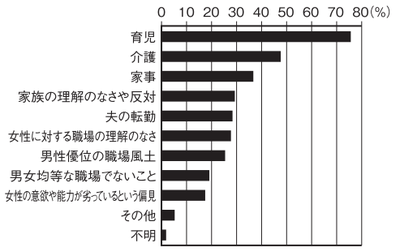
グラフ⑦
6歳未満児の父の1日あたりの家事育児時間



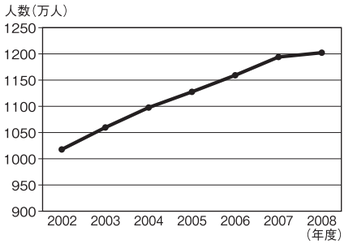
グラフ③　女性の年齢階級別労働力率と潜在労働力率



グラフ④　女性が働き続けるのを困難にしたり障害になること



グラフ⑤　女性非正規雇用者の推移



働きたいのはやまやまだけど

就活から学んだことは、「女の私には機会なんて与えられていない」現実だった

私は 1998 年度、最初の就職氷河期卒である。就活の話題を聞くたび、自分の就活を思い出す。人生で一番つらい思い出だ。理系の四大、地方出身の女子、就活に一番不利な条件であったのだろうと思う。でも当時はそんなことは就活に関係ないと信じていた。

98 年といえば IT バブルの幕開けでもあり、進路を変更して就職に SE を選んだ友人も多かった。また、新しい就業の形として「派遣労働」は、正社員より自由度が高く給与も良いともてはやされていたのを覚えている。

IT バブルによる高揚感とともに、大人たちは「目的意識をもて」「自分にあった仕事を」と言っていた。が、有効求人倍率過去最低という状況の下、専門や希望など求めてはいられなかった。

就活は企業 100 社に手書きで就職説明会への申込みハガキを送ることから始まった。企業からの「ご縁がなくて」という留守電や手紙に落胆し、何がいけなかったのかを自問自答するが答えのないまま就活をやめることもできなかった。最終面接であっさり落とされたときは、具体的な話をしていただけあって裏切られた気持ちになった。

「部活やサークル、バイトの話はありきたりで聞きたくない。そんなのはアピールポイントでもなんでもない」と言い放った面接官がいた。今ならバイトの経験も役立つと確信できるが、当時は私の学生時代は無駄ばかりなんだと本気で思った。

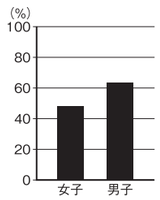
説明会に行ったら、60 人中女子は私だけということがあった。理系男子の内定が終り、文系男子の募集に空気の読めない女子一人。企業は男女雇用機会均等法の手前、断れなかったのだろう。均等法があっても、女の私には機会なんて与えられていないじゃないかと思い知らされた瞬間だった。

当時、四年生の夏までに決まらなかったら新卒入社は難しいと言われていた。周りの男子は条件に関係なく順調に決まっていた。夏を迎えたころに決まっていなかったのは地方出身の女子ばかりだった。

メディアでは女性の社会進出が取り上げられ、学校でも男女平等と教えられてきたが、「女性の社会進出」も「男女平等」も私の現実からは遠い理想でしかなかった。ありのままの私は社会に受け入れてもらえなかったのだ。いまだにどうすれば“正解”だったのかわからない。私はただ、就職をして社会人になりたいと思っていただけなのに。

就活は、私に社会から見放された感覚を植え付け、自尊心を奪った。だから、私は今でも社会を心から信じることができないのだ。

グラフ⑧
大学、短期大学及び高等専門学校の「就職内定率」状況



[資料出所] ＊グラフ①②/「西宮市次世代育成支援行動計画（後期計画）策定のためのニーズ調査」平成 21 年度 西宮市 ＊グラフ③/ 平成 22 年版「男女共同参画白書」内閣府 ＊グラフ④/「女性労働者の処遇等に関する調査」2005 年　(財)21 世紀職業財団 ＊グラフ⑤⑥/「労働力調査」平成 19 年度 総務省統計 ＊グラフ⑦/ 平成 19 年版「少子化社会白書」内閣府 ＊グラフ⑧/「平成 22 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（平成 22 年 10 月 1 日現在）について」厚生労働省